

SHOW HEY シネマールム

★★★★★

宣戦布告

2002 (平成14) 年12月8日鑑賞

Data

監督：石侍露堂

出演：古谷一行／杉本哲太／夏木マ

リ／佐藤慶／多岐川裕美／

夏八木勲／財津一郎

👁️👁️ みどころ

日本海沿岸に潜水艦が座礁し、武器を持った兵士たちが日本国内に潜入した。さあ、日本政府の対応は……。北朝鮮との国交正常化交渉を契機として次々と明らかにされる北朝鮮の実態。自衛隊の出動の可否は？小銃、重火器、ヘリの使用の許可は？がんじがらめの「民主主義」国、日本の法体系はこれでいいのか？そして日本国は本当に大丈夫なのか？この映画で描かれた物語が現実となる日は……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<国籍不明の潜水艦が日本海沿岸に座礁>

某年某日、実力者の篠塚義章（仮名）内閣官房長官（佐藤慶）と談笑中の諸橋揆一郎（仮名）内閣総理大臣（古谷一行）のもとに、日本海敦賀の沿岸に、一隻の小型潜水艦が座礁した旨の報告が入った。その艦の国籍は？中国？ロシア？韓国？いや違う。すると……。間違いなく、あの北の国（北東共和国—仮名）の潜水艦だ。

直ちに調査開始。艦の中には一人の武装乗組員の死体があったが、日本接近の目的はもちろん、乗組員の数さえわからない。しかし武装した乗組員が、日本国内へ上陸し、潜伏していることは確かだ。山中で一人を逮捕したが、もちろん簡単に口を割らない。情報は整理されないままだ。

瀬川守良（仮名）内閣情報調査室長（夏八木勲）は、情報収集とその整理を担当する部局のボスで、諸橋総理の信頼も厚い。内閣調査室は、約1年にわたって、北東共和国スパイの活動を見張っていたが、現時点では未だ解明できていない。

すべての交通を遮断することは、かえって国民の不安を煽ると考えた政府首脳は、とりあえず警察力による捜査と鎮圧を指示。自衛隊の出動は時期尚早と判断した。

＜被害の発生—自衛隊の出動＞

武装し、本土に上陸した北東共和国の乗組員たちがいることは確か。その逮捕と鎮圧に向かう警察。警察は当然、犯人の逮捕・鎮圧のため、射殺許可を要請。しかし日本はその手続が大変だ。発砲許可をめぐる手続のややこしさは、『突入せよ！あさま山荘事件』でおなじみのテーマだ。

そんな中、民間人の被害が発生。そして、「犯人」を追いつめた警察官にも被害が……。ついに自衛隊の出動か？しかし仮に自衛隊が出動しても、日本の複雑でがんじがらめの法体系上、自衛隊は一体何ができるのか？たとえば、テントをどこに張れるのか？自動小銃での撃ち合いはどのような場面なら可能なのか？手榴弾の使用はできるのか？重火器の使用許可は？事前の包括的な許可は出るのか？e t c……。その答えは、概ねすべてノーというものだ。つまり、相手から小銃で撃たれ、被害が発生したら、その時点で「撃ち返してよいか」と本部に問い合わせをし、本部がOKすれば、やっと撃ち返せるというシステムがほとんどなのだ。従って、撃ち返すときには、もはや相手は逃走して現場にはいないだろうことは誰でもわかること。

「一体こんな国に誰がしたのか？」と自問自答しながら、諸橋総理は、遂に自己の政治生命を賭けて、自衛隊の出動を許可した。自衛隊の出動は、北東共和国をどのように刺激するのか？場合によれば、「宣戦布告」と解釈されてもやむを得ない、と覚悟しなければならぬ重大な決断だった。もちろんこれらの動きは、巧みなスパイ網の中、刻々と北東共和国へ伝達されていた……。そしてその情報を、結果的に銀座の美人ホステスを通じて漏らしていたのは、なんと内閣情報調査室の人間。瀬川室長が信頼する部下だった！女の色気に弱いヤツは情報調査室勤務には不向きというわけだ。

＜上陸兵士たちの火力は強力＞

自衛隊は大部隊大装備で包囲網を狭めていった。しかし……。トンネルの中を捜索中の隊員たちに突如、自動小銃が浴びせられた。次々と倒れていく隊員たち。そして「敵兵」たちは直ちに逃走。それを追う隊員たち。小銃の発砲は許されたものの、手榴弾の許可はまだ。その許可を求める手続の間にも、次々と隊員たちの被害は拡大した。こんな状況の下、現地指揮官は、独断で手榴弾の使用許可を出した。この決断は、ストーリーの流れからみれば、心情的には同意できるものの、これではシビリアンコントロールは全く無力で、まさに昔の「関東軍独走」と同じことになってしまう。

しかし手榴弾の使用によってやっと反撃がなり、「敵兵」たちを小屋まで追いつめた。しかし小屋に立てこもる「敵兵」たちの火力はなお強い。そのためヘリからの攻撃を要請したが、官邸は今はそのどころではなかった。まさに核戦争勃発か……。というところまで事態は進展していたのだ。

<官邸の作戦指導は>

場面は官邸の作戦指導室。ここはコンピューター満載で、最先端の設備を誇る立派な部屋だ。時々刻々と状況が伝えられ、それが大画面に写し出される。北東共和国が艦隊を派遣した、中国も臨戦態勢に、そして北東共和国はミサイル発射準備。核を含む戦争開始はいよいよ決定的な状況だ。「自衛隊出動は宣戦布告に等しいかもしれないが、自衛隊出動の決定は内閣全体の責任。異論がある者はこの場で述べてもらいたい。後になってあの時俺は本当は反対だったんだと言うことは決して許さない！」と諸橋総理は言った筈だ。しかるにこの期に及んで、外務大臣は「だから言わないことじゃない。俺はもう責任を持ってない！」と叫んで作戦指導室を出て行ってしまいうり様。一体この国の指導者はどんな神経をしているのか、そしてハードは立派でも、何とお粗末な危機管理体制か！背筋が寒くなってしまいうシーンが連続するが、残念ながらこれが今の日本の実態そのものと言わざるを得ない。

瞬時スクリーンに写し出された、「敵兵」の反撃の前に続出する自衛隊員の被害を目の当たりにした諸橋総理は、遂にヘリでの攻撃を許可。陸上自衛隊の最強ヘリ「コブラ」が登場すれば、敵兵がたてこもる小屋などは一撃で鎮圧だ。自衛隊員の大きな被害を出しながらも、これにて北東共和国の上陸部隊はすべて鎮圧された。

<なぜか敵はUターン>

北東共和国からのミサイル発射の現実的危機に対し、諸橋総理は自衛隊の出撃命令を出そうとした。しかしそれは先制攻撃になるから憲法上許されていないと説明されて決断できないまま。そんな時、北東共和国や中国の動きに対応して、遂に在日米軍が日米安保条約にもとづいて動いた。直ちにステルス戦闘機が出撃したのだ。日本政府首脳はかたずをのんで、ただこの動きをスクリーンで見守るばかり。

しかしここで突如、北東共和国のミサイル発射が解除された。そして出動していた艦隊も突如Uターンした。

これはなぜか？考えられる理由は2つだ。その1つは瀬川情報室長の知恵。すなわち情報が漏れていることを逆利用して敵スパイに与えた偽情報が効いたこと。そしてもう1つは、近代的なコンピューターとはまったく関係のないこと。つまり弱腰とタカをくくっていた北東共和国が、諸橋総理や在日アメリカ軍の予想外の反撃に戸惑い、本気で対抗してくるかもしれないと考えて手を引いたことだ。

要するにケンカには気合が大切という単純なこと。もちろんこの映画は作り話。『13デイズ』で描かれた1962年の「キューバ危機」のような本物の話ではない。だからこんな予想もしないUターンで終わり、ホッとすることができたが、もしこれが現実だったら・・・。

<戦後57年一本気で考えるべき危機管理>

私は愛媛大学での4日間の集中講義をまとめた『実況中継 まちづくりの法と政策』（2000年7月、日本評論社）、『実況中継 まちづくりの法と政策PARTⅡ—都市再生とまちづくり』（2001年9月、日本評論社）で、戦後50数年の今、日本の民主主義を根本から見直すべき必要性を1つのテーマとして強く訴えた。私が今の「日本病」に付けた病名は、①問題先送り体質、②観客民主主義、③集団無責任体制の3つだ。これを克服しない限り、日本国の民主主義の立て直しはあり得ないし、経済不況の克服、混迷する政治の立て直し、荒れる教室や腐った文化の立て直しもあり得ないと私は確信している。また戦争、国防、憲法、自衛隊、集団的自衛権等の深刻なテーマを論ずるためには、まずまともな日本語で本音の議論を展開できることが大前提だ。しかし今、まともな日本語で本音の議論をできる人たちはどれ位いるのだろうか。心細い限りだ。

<さびしい顧客数>

この映画の上映はマイナーな映画館だが、座席数はすごく多い。しかしその観客はわずか10名足らずという有り様だ。若者は誰もこんな映画に興味を持たず、みんな家族揃って『ハリーポッター』だろう。別に『ハリーポッター』が悪いわけではない。しかしたまには、まともに考え、悩み、勉強し、議論する素材にあたることも必要ではないか、そう思わずにはいられない。今、こんな時代に、これだけの映画をつくった東映と石侍露堂（せじ・ろどう）監督に拍手を送りたい。そして何よりも、多くの日本人に、こういう映画を見て、そこで提起された問題点を考え、議論してもらいたい。それが民主主義国家日本というものだろう。

2002（平成14）年12月9日記